

ティグリス河畔のセレウケイア (I)

—テル・ウマル (Tell 'Umar) とヘーローオン (hērōon)—

田 中 穂 積

はじめに

ティグリス河畔のセレウケイア (ギリシア語の表現), とよばれた都市の遺跡は, メソポタミアの故都バビロンの北約 60 km, バグダードの南約 35 km に位置する。それは, セレウコス 1 世が前 4 世紀末, 古来の交易地オピス近くに, いわゆる植民都市としての基礎をおいたことにはじまる。その後, 発展したこの都市については, 多くのギリシア・ローマの古典に散見するが, まとまった記述は, そう多くない。前 1 世紀末頃のストラボーン, 1 世紀半ば過ぎのプリーニウスなどによる, 簡単なティグリス河畔のセレウケイア記述において, 両者とも, セレウケイアが発展したのにたいして, バビロンでは, 衰退がはなはだしかったことをあげている (Strab. XVI, 1, 5; Plin. HN, VI, 122)。ことに, プリーニウスはセレウキア (ラテン語の表現) の人口を 60 万人と述べており, その後 5 世紀前半において, オロシウスは, 2 世紀半ば頃のセレウキアの人口を 40 万人としている (Oros. Paul. VII, 15)。

セレウコス朝の衰退後もこの都市人口が増加したことは, その住民の多くがメソポタミアないし近隣のオリエント人であったことは, いうまでもなからう。それは, また, いままでの発掘の結果からも推測できるのである。この都市の歴史については, 別に取り上げるので, ここでは, 発掘からみたセレウケイアの特徴を取り上げることにする。

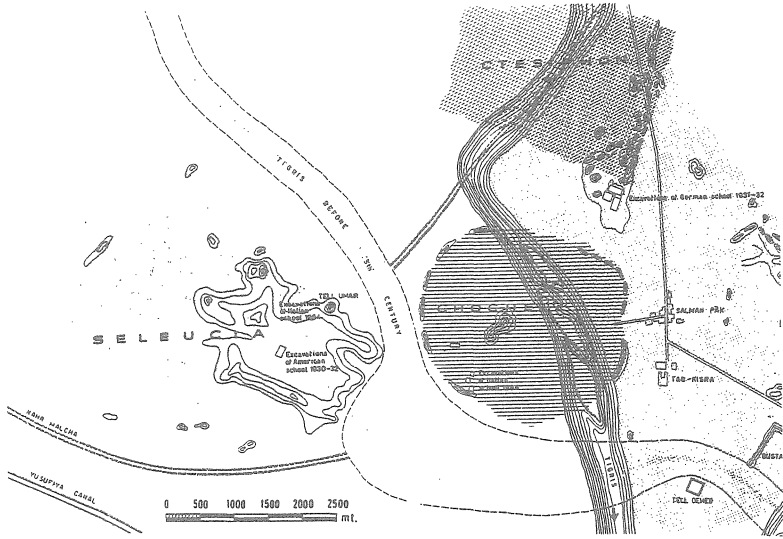
ティグリス河畔のセレウケイアの発掘は, まず 1927-1937 年にわたり, ミ

シガン大学を主とするアメリカ隊によっておこなわれた。その最初の5シーズン(1927/8-1931/2年)は、L. ウォータマン指揮下でおこなわれ、the Toledo Museum of Art (後の2シーズン)、ならびに the Cleveland Museum of Art が、それに参画した。1936/7年の最終発掘は、ミシガン大学が単独でおこない、R. H. マクダウェルが発掘現場の指揮をとり、後に最後の報告書をだしたC. ホプキンズも、これに参加している⁽¹⁾。

アメリカ隊のあと、このセレウケイアの発掘をおこなったのは、イタリア隊であった。トリノ大学の Centro Scavi e Ricerche di Torino がイラクの関係機関との共同で、まず1964-1976年の期間に発掘をおこなった。その最初は、セレウケイアと、いわゆるクテシフォンの両地域において作業がすすめられ、セレウケイアについては、A. インヴェルニッツィ指揮のもと、まずテル・ウマルの発掘からはじめられ、次いでその南側の地点に移された。また1985-1989年にもおこなわれている⁽²⁾。

I セレウケイアの遺跡

現在、Al-Madai'in 地域にあるセレウケイアの遺跡は、セレウコス朝時代にはティグリス流路の西岸に位置していた。川は都市の東隅で最も接近しながら、南の方へとカーヴしており、また、この辺で、かつてクテシフォンとみられていた Choche、つまり後の(新)セレウケイア、次いで Veh-Ardashir (アルダシールの都市)とよばれた町がセレウケイアに最も接近していた(図1)⁽³⁾。したがって、ティグリス川とセレウケイアを結ぶ港は、都市の東端にあったようである。航空写真⁽⁴⁾をふくめた調査によれば、セレウケイアの遺跡は、およそ550ヘクタール以上におよぶとみられ、形状は、ほぼ東西に長い長方形をなしている。かつて、プリーニウスは、この都市の市壁は鷺が翼を広げたような形状であると表現した(Plin. *HN*, VI, 122)。これについて、C. ホプキンズは、鷺が飛び立つ直前、つまり両翼肩を高めた姿勢とうけとめ、頭部にあたる場所には港があったとする⁽⁵⁾。



☒ 1 Mesopotamia, I (1966), Pl. I

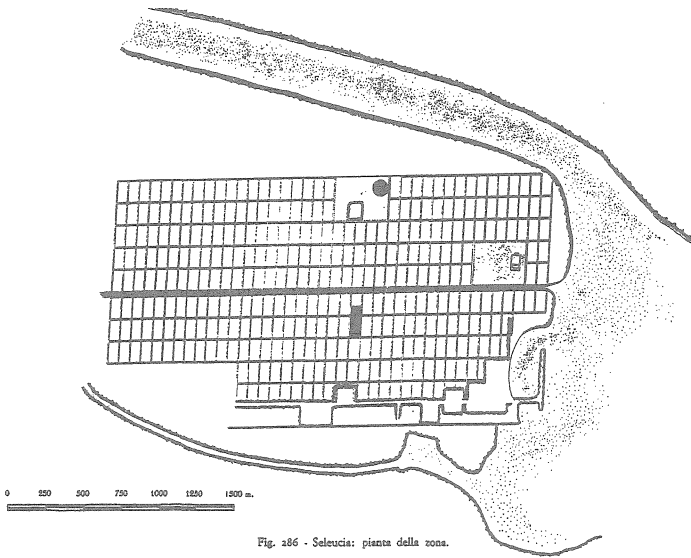


Fig. 286 - Seleucia: pianta della zona.

☒ 2 Mesopotamia, II (1967), Fig. 286

セレウケイアの都市構造は、アメリカ隊とイタリア隊の発掘成果によれば、次のようである (図 2)。

都市計画は、ヒッポダモス方式によっており、道路が直角に交差する構造をなしている。格子状をなす区画は、ヘレニズム世界でも最も大きく、そのひとつは、およそ 75×150 m の大きさである。都市の中心線をなす道路とそれに沿った排水用運河が都市を南北に分かつように、東西に走っている。このことは、次のように推定できる。運河によって分けられた北側は、都市の公共の機関としての建築物が配置され、南側は主に住民の居住地域とされていたということである。

つまり、都市の北側の方では、次のような遺跡が明らかにされた。北部分の一面に目立った丘をなすテル・ウマルがあって、近くに小丘がいくつか存在し、セレウコス朝のヘーローオンとみなされる建造物もそのひとつである。テル・ウマルの南には細長い泥煉瓦の建物があり、セレウコス朝時代、ここには経済上の公文書などの記録保管所がおかれていた。また、南部分には、アメリカ隊が神殿とみなした 2 つの建物跡が離れて存在する。

都市の南側には、幅の広い街路が、また東西に走っており、複数の広場やアゴラが設けられている。しかし、これらの施設は、最初からのものではない。つまり、建設当初の都市計画が広大なものであったとしても、セレウコス朝時期 (前 4 世紀末から前 2 世紀の半ばまで) に、都市全域に建造物が配置され、人が居住していた訳ではない。確かめられる都市構造は、パルティア時代末である。

アメリカ隊による発掘について、C. ホプキンスがまとめた報告書によると、都市北側では、上述のテル・ウマル、その近くのいわゆるヘーローオン、それに神殿跡とみなされる 2 つの遺構であり、都市の南側では、住居地域における G 6 ブロックの発掘、また 2 つのアゴラ、それに劇場とみなされる遺構の推定である。イタリア隊の方は都市の北側に力を注いだ。最初はテル・ウマルの発掘に着手し、順次その範囲を広げているが、それとともに主にテル・ウマルの南側にある記録保管所の建築群、また記録保管所の東側にある若干の

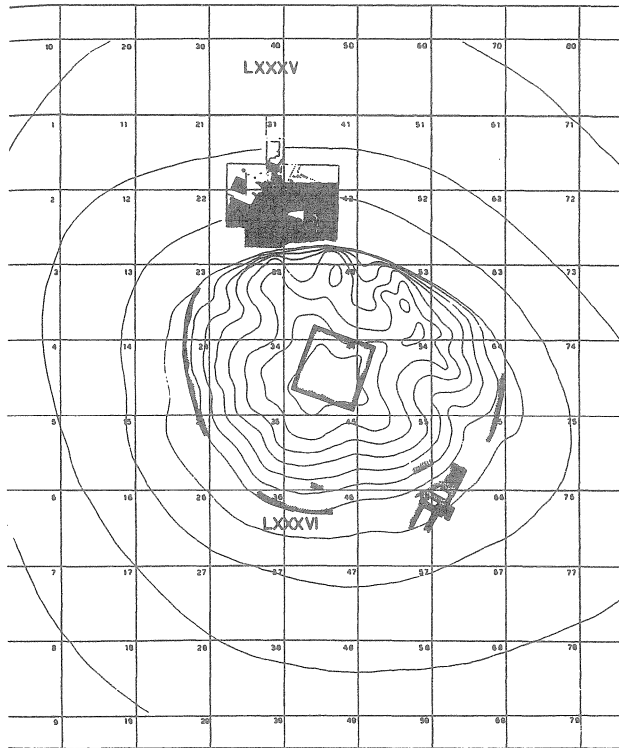
建築物の発掘である。

しかし、いままでの発掘は、広大な遺跡からみれば、ごく一部にしか過ぎず、また多くは表層部の発掘ないし調査である。したがって、セレウケイアの初期事情の解明は十分でなく、今後の調査がまたれる。しかし、現在までの発掘成果をもとに、まず、本稿において、テル・ウマルと、いわゆるセレウコス朝のヘーローオンについての考察を紹介しておきたい。

II テル・ウマル (Tell 'Umar)

テル・ウマル (Tell 'Umar) はセレウケイアの遺跡のなかで、目立った構築物である (図3 北側の発掘区域はイタリア隊初期)。アメリカ隊による、テル・ウマルの形状や構造を確認するための発掘は、1931年12月から1932年1月にかけておこなわれた⁽⁶⁾。それは周辺よりも16m高く、見たところは、円い山形の堆積で、全体の形状は楕円形をなしており、南東から北西方向に94.55m、北東から南西方向に79.30mの長さであった。また、マウンド中央には、日乾し煉瓦でつくられた18m平方の堅固な塔の跡が確認された。イタリア隊の発掘は、テル・ウマル周域の北側にはじまり、次第に西側に広げられた⁽⁷⁾。そこから、貨幣、テラコッタ、ギリシア風の飾物など多くが出土している。テル・ウマルの上部は、ホスロー2世貨幣の出土が示しているように、サーサーン朝時代にいたっている。つまり、パルティア時代に再び建造がおこなわれたり、サーサーン朝時代、壁で囲まれた防御塔の構築などで、その初期の歴史は不明確になっている。

上述のようにテル・ウマル初期の遺構は十分に知ることはできない。また、その構築の目的や時期についてもはっきりしない。L. ウォータマンは、テル・ウマルのマウンド頂上の瓦礫の下約1mのところ、前9世紀の4半期末頃のバビロンの支配者 Marduk-balāssu-iqbi 名の焼煉瓦の発見により、これを新バビロニア時代におくことを示唆し、また、このテル・ウマルをジググラトと呼ぶことには躊躇したが、それ以外の呼び方はないとみた⁽⁸⁾。しかし、



Seleucia, Tell 'Unayr: plan of the site with the structures found by the American Expedition.

0 10 20 30 40 50
m.

図3 Mesopotamia, I (1966), Pl. II

例えば, G. ペッチナトは, セレウケイアで新バビロニア時代の楔形文字を刻んだ煉瓦 (42種) が発見されていることについて, 近くに有名なネブカドネザルの防御築壁があったに違はなく, そこから運ばれた可能性が高いとみている。そして Marduk-balāssu-iqbi については, むしろナボニドウスを示唆している⁽⁹⁾。S. B. ダウニは, テル・ウマルの構造は, バビロニア時代以後の様式であり, セレウケイアがセレウコス1世の建設に関わることから, その全体の構造はセレウコス朝初期とみてよいであろうとする⁽¹⁰⁾。

ところで、イタリア隊はテル・ウマルの南で、記録保管所の建物を発掘し、この建物跡から、多くのブツラ (bullae) を発見している。その連続した年代のブツラとして、セレウコス暦 82-133 年 (230/29-179/78 BC) のものがみられる。テル・ウマルと記録保管所は道路で隔てられているが、A. インベルニッツィは、セレウコス朝期、両者が複合的關係にあったことを示唆している。要約すれば、メソポタミアにおける経済文書の保管が神殿でなされてきたという、宗教と経済の一体化の面がここにもみられるとし、テル・ウマルに宗教的性格を求めようとするものである⁽¹¹⁾。S. B. ダウニは、もし A. インヴェルニッツィの見解が容認されるとすれば、この点において、セレウコス朝時代におけるセレウケイアは、ウルクの事情にかなり類似しているとみる。また、それは都市生活における聖所の経済的重要性を示しており、セレウコス朝の支配者が大規模な聖所について関心をもった例とみる⁽¹²⁾。

III いわゆるセレウコス朝のヘーローオン (hērōon)

アメリカ隊は、テル・ウマルの東、そして、やや南寄りに当たる低いマウンドで、東西軸の長さ約 55 m、南北の最大幅 40 m の建物を発掘した (図 4)。それは、1 辺が 23 m の方形中庭をもつもので、Parthian Villa (パルティア人の別荘) とよばれた。つまり、セレウケイアにおけるパルティア時代の家が、通常、広い中庭をもち、その回りに部屋が配置されていたことによる。

ところで、C. ホプキンズは、セレウケイアにおける遺構について、4 つの層序をたて、その各年代基準を設定した。第 IV 層はセレウコス朝の首都期 (307-141 B. C.)、第 III 層は自治都市期 (141 B. C.-43 A. D.)、第 II 層はパルティア支配期におけるトラヤーヌスの焼討ちまで (A. D. 43-116)、第 I 層はその後パルティア帝国の最後まで (A. D. 115-227)、とする 4 時期である⁽¹³⁾。

そこで、Parthian Villa とよばれる遺構の場所においては、第 IV 層で確認できる遺構は僅かであり、第 III 層においてセレウコス朝のヘーローオン (壘

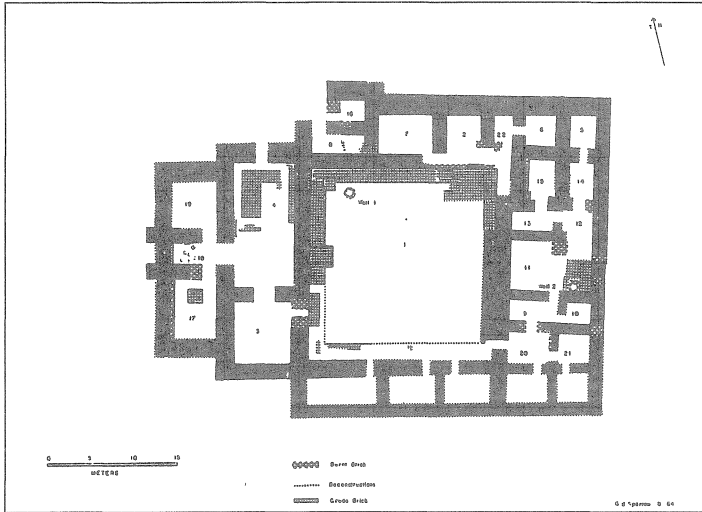


Fig. 11. Plan of Heroon, level II

図4 Hopkins, Topography, 18, Fig. 11

廟)とみなせる遺構を推定し、それが第II層の構造、つまり Parthian Villa に類似しているとみなした。そして、C. ホプキンズによるヘーローオンの推定は、後で述べるように、Parthian Villa に使われていた石面の刻文内容をセレウコス朝における王家崇拝に関係づけ、また建物がドゥラ・エウロポスの諸神殿に類似している、とみなしたことによる⁽¹⁴⁾。

したがって、Parthian Villa の第II層における建物の構造が問題となるが、ここでは、その詳細は省略しておきたい。この建物が聖所とみなされたのは、まず中庭の北東部における構造物を屋外の祭壇と推定したことにある⁽¹⁵⁾。また、C. ホプキンズは、中庭の西側の部分にプロナオス (pronaos) とナオス (naos) の構造を想定している。つまり、中庭の西に大きさの異なる部屋があり、その小さな部屋 [3] には、中庭から入れ、大きな部屋 [4] には外から入れるようになっている。後者には、焼煉瓦で舗装されており、祭壇へすすむ部屋とみなされる。また、それは礼拝者をみる監視者の居場所で、ドゥラ・エウロポスの神殿の場合に似ているとする。また、部屋 [17] の南

端には入念に整備された排水溝がみられ、この場所で水を使用したとみている。A. インヴェルニッツイは、建物の煉瓦積みは完全に消失しているので、その機能は決定し難いが、テル・ウマルの宗教的複合体の部分として機能したのではないかと仮定する⁽¹⁶⁾。なお、S. B. ダウニは、他所のヘーローオンと比較しながら、この建物が、アイ・ハナム遺跡でみられるキネアスのヘーローオンと異なる点を指摘している⁽¹⁷⁾。

次は、上述したように、セレウコス朝のヘーローオンとみなせる 1 碑文の問題である。C. ホプキンズによれば、その碑文は、Parthian Villa 中庭の東、建物への入口にあたる部屋 [11] の第 IV 層にあったとする⁽¹⁸⁾。まずこの碑文を論じた R. H. マクダウエルによれば、次のようである⁽¹⁹⁾。碑文の材質は石灰石で、高さ 25.2 cm、幅は 20-16 cm の間で一定せず、厚さも変化があり、10-12 cm の間である。刻文は 6 行からなっているが、左側が欠けており、表面も磨耗などにより、読み取れないところがある。文字の大きさは、平均した高さが 15 mm である。

まず、R. H. マクダウエルは、次のように碑文面を判読し (左)、そして欠損箇所を推定した (右)。

Χ Ο Υ Δ Ε Σ Ω Λ	Ἀντιόχου δὲ σω[τῆρος
Σ Ι Α Ε Ω Σ Δ Ε	βα]σιλέως δὲ
Ξ Ε Ν Ο Υ Ι Ε Ρ [ρ] Μ Ν Η	ξενου ἱερ[ο]μνή[μονος
Σ Α Γ Ω Ν Ο Ο Ε Τ Ο Υ Μ]ς ἀγωνοθέτου μ
Τ Α Μ Ι Α] Σ Ω Τ Α Σ	ταμί[α]ς ὤτᾶς
Κ Ε Σ Τ Ρ Α Τ Ο Υ]κεστράτου

かれは、1 行目で、アンティオコス (1 世)・ソーテールを読取り、その前にセレウコス 1 世がくるものと推定し、これらを神格化された初期の王とみた。そして 2 行目で、“(βα)σιλέως” (王の) と読める、その統治者名をセレウコス 2 世とみなした。3 行目で、祭事職“ἱερομνήμων”，4 行目で、競技の主権職“ἀγωνοθέτης”の語を推測し、5 行目では、監督者“ταμίης”と、また人名としての“ὠτᾶς”をおいた。6 行目の最後は、固有名詞、おそらく献納者の父の名がくるものと判断した。ここに、R. H. マクダウエルは、断片

碑文から、ある者からのセレウコス2世への献呈碑文であることを示唆した。

R. H. マクダウエルのもと、碑文の破損部分を推定し、全体の復元が試みられた。ことに、2行目ないし3行目に来るとおもわれる王名については、碑文の刻文時期の王をさすものとみられ、碑文年代の手掛りと考えられる。それをR. H. マクダウエルは、いま述べたように、セレウコス2世とした。M. ロストフツェフはセレウコス3世を示唆し、オータースではなく、ソーターズなる者がアーキトリーブ (architrave) においた建物の碑文とみている⁽²⁰⁾。R. ムテリユドは、いくつかの問題点を指摘し、ためらいつつも、アンティオコス2世をあげ、碑文の大きさからいって、それは石板で、何かの記念のため、壁にはめ込まれたものとしている⁽²¹⁾。

このあと、C. ホプキンズは、R. ムテリユドの見解ならびに、その示唆するところを勘案しつつ、デーメートリオス2世を当てている⁽²²⁾。C. ホプキンズの場合、デーメートリオス(2世)・ニカトールが、アンティオコス4世の王統に対抗するため、セレウコス朝の祖セレウコス1世のニカトール(征服者)と同じエピセツとをとり、それにパレスチナで自身の威光を示したように、セレウケイアにおいても同様に振舞ったこと、また先にアンティオコス(3世)が王国内に現存王の支配者崇拝を広めようとしたこと、等を念頭におき、当碑文の復元を試みている。すなわち「セレウコス・ニカトールとアンティオコス・ソーテールの神官、何某の子、誰、そしてデーメートリオス・ソーテールと王デーメートリオス・ニカトールの崇拜者、ピロクセノス(?)の子、誰、そして競技を主催した、何某の子、誰、そして監督者オータースならびに何某(ニケストラトス?)の子、公職者、誰、[この建物(またはこの贈り物)を奉献した]」。しかし、残念ながら、いずれの時期かについては、確実なことはいえないが、多くの碑文例からみて、セレウコス朝の王たちの名と、その王家崇拝に関係する者たちの名があげられていたとみられる。

最後に。本稿において、セレウケイア遺跡の概観、そしてテル・ウマルと、

いわゆるセレウコス朝のヘーローオンに関する問題点を挙げたが、紙幅の関係上、多くを省略したことを断っておきたい。

註

- (1) Hopkins, C., *Topography and Architecture of Seleucia on the Tigris*, Ann Arbor, Michigan, 1972; Downey, S. B., Seleucia on the Tigris, *Mesopotamian Religious Architecture: Alexander through the Parthans*, (Princeton University Press, 1988), 51-63; Id., Seleucia on the Tigris, *The Oxford Encyclopedia of Archaeology in the Near East*, (Oxford University Press, 1997), Vol. 4, 513-4.
- (2) *Mesopotamia*, I (1966) -XXV (1990) の発掘報告、ならびに Invernizzi, A., Ten Year's Research in the Al-Mada'in Area: Seleucia and Ctesiphon, *Sumer*, 32 (1976), 167-75, Figs. 1-10; Turin (Invernizzi, A. et al.), *La terra tra due fiumi, catalogue to the exhibition*, (Turin, 1985), 87-141.
- (3) Gullini, G., Problems of an Excavation in Northern Babylonia, *Mesopotamia*, 1 (1966), 14-19, 25-32, Pl. I.
- (4) Hopkins, C., *op. cit.*, 165, Pl. II; *Mesopotamia*, II (1967), Fig. 284.
- (5) Hopkins, C., *op. cit.*, 2, Fig. 1. なお、等高線図については、4, Fig. 3.
- (6) Waterman, L., *Preliminary Report upon the Excavations at Tel Umar, Iraq*, Ann Arbor, Michigan, 1931; Id., *Second Preliminary Report upon the Excavations at Tel Umar, Iraq*, Ann Arbor, Michigan, 1933; Hopkins, C., *op. cit.*, 8-12.
- (7) Invernizzi, A., *Mesopotamia*, I (1966), 39-62, Figs. 1-15, Pls. I-IV; II (1967), 9-32, Figs. 1-17, Pls. I-II; III-IV (1968/69), 11-27, Figs. 1-28, Pls. I-III; V-VI (1970/71), 13-19, Figs. 1-13, Pl. I.
- (8) Waterman, L., *op. cit.*, (1933), 75-8, Pl. XXV Fig. 2; cp. Hopkins, C., *op. cit.*, 8-10. なお、ウォータマン説の継承については, Colledge, M. A. R., *Parthian Art*, (London, 1977), 41.
- (9) Pettinato, G., Cuneiform Inscriptions Discovered at Seleucia on the Tigris (1964-1970), *Mesopotamia*, V-VI (1970/71), 49-66. ノボニドゥスについての示唆は、同箇所 54, n. 20; Frame, G., *Rulers of Babylonia: From the Second Dynasty of Isin to the End of Assyrian Domination (1157-612 BC)*, (University of Toronto, 1995), 109.
- (10) Downey, S. B., *op. cit.* (1988), 54.
- (11) Invernizzi, A., *Mesopotamia*, I (1966), 61-2; III-IV (1968/69), 29-36, 75,

- 119-22. テル・ウマルに劇場を見出そうとするインヴェルニッツィの推定については, Invernizzi, A., *Hellenism in Mesopotamia: A View from Seleucia on the Tigris*, 『アルラーフィダーン』 (*Al-Rāfidān*), 15 (1994), 9.
- (12) Downey, S. B., *op. cit.*, 54.
- (13) Hopkins, C., *op. cit.*, 5-6.
- (14) Hopkins, C., *op. cit.*, 13-25.
- (15) Hopkins, C., *op. cit.*, 18.
- (16) Invernizzi, A., *Excavations in Squares CVI 69/70/79/80 (the Archives Building)*, *Mesopotamia*, III-IV (1968/69), 29-30.
- (17) Downey, S. B., *op. cit.*, 59.
- (18) Hopkins, C., *op. cit.*, 20, 24.
- (19) McDowell, R. H., *Stamped and Inscribed Objects from Seleucia on the Tigris*, (Ann Arbor, Michigan, 1935), 258-9. 碑文の写真については, Hopkins, C., *op. cit.*, 168, Pl. V.
- (20) Rostovtzeff, M., ΠΡΟΓΟΝΟΙ, *Journal of Hellenic Studies*, 55 (1935), 66.
- (21) Mouterude, R., Review of McDowell, *Stamped and Inscribed Objects from Seleucia on the Tigris*, *Mélanges de l'Université Saint-Joseph*, 19 (1935), 119-20.
- (22) Hopkins, C., A Stele from Seleucia on the Tigris, *Mélanges de l'Université Saint-Joseph*, 37 (1961), 237-46; *Id. op. cit.* (1972), 24-5.